

インターバンクの声（2015年5月20日）

4月の米連邦公開市場委員会（FOMC）議事要旨の発表を控え、為替市場も短時間ながら静かな値動きになるかとも思われたが、複数の主要通貨に大きな変化があった。最初に変化が見られたのがユーロで、アジア時間の終盤に欧州中央銀行（ECB）のクーレ理事の資産買い入れペースを加速させるとの方針が伝わったことで、1.13ドルを挟んだレベルから短時間で1.11ドル台中盤近くまで売り込まれた。次に大きく変化したのが英ポンド。この前夜のクーレ理事の発言に遅れて反応していたユーロの影響もあったようだが、直接的は自国の4月消費者物価指数が前年比でマイナスとなる発表が大きく響いたようだ。ポンドは実に1.56ドル中盤からニューヨーク市場の序盤には1.54ドル台半ばへと下落した。最後に動いたのがドル円相場。120円台に乗ってきたところでドルの上値の重さは相当なものと思われていたが、4月の米住宅着工件数が事前の予想を大幅に上回ったことから徐々に120円70銭台までドルが買い上げられた。この住宅着工の結果で再び景気減速懸念が後退する格好になってしまったが、一旦後ずれしてしまった利上げ時期見通しをもう一度引き戻すには、やはり明日の東京時間未明のFOMC議事要旨を待たなければならないだろう。

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。